氏　　名　西（にし）　隆太朗（りゅうたろう）
学位(専攻分野)　博　士（教育学）
学位記番号　教　博　第 25 号
学位授与の日付　平成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件　学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻　教育学研究科臨床教育学専攻
学位論文題目　治療の場における二者心理学
——心理療法の治療論に関する精神分析的研究——

論文調査委員　（主査）教授 山中康裕　教授 伊藤良子　教授 東山紘久

論文内容の要旨

本論文は現代の精神分析的心理療法において，主として，治療論として，二者心理学（two-person psychology）をとりあげ，この観点から，Balint, Ferenczi, Winnicott の 3 者に言及し，かれらの論じた二者心理学を詳細に論じて，著者独自の観点から再構成し，今後の研究につなぐべく，それを精緻化せんとしたものである。

現代の心理療法には多様な立場が存在し，それぞれの立場から治療の実践がなされている。治療者は実践の中で，いかに患者と関わるのか，また，その関わりが実際に治療的なものでありえているのか否か，といった基本的な問題についての判断を常に行っている。この判断を支えているのは，治療者がもつ心理療法的な立場である。特に，専門家としての治療者は，自らの治療実践を，単なる主観的な評価を超えて検証していかねばならない。治療実践を導くとともに，その検証を可能とするものを，その立場における治療論と呼ぶことができるが，それが具体的にいかなるものであるのかが問われているのである。病因論などに比べると，治療論についての研究は，従来十分になされてきたとは言いがたい。今日の心理療法における学派の氾濫は，しばしば混乱にすら譬えられるが，このような状況においては，それぞれの立場における治療論を明確にし，批判的な検証を通じて基礎づけていかねばならない。さて，精神分析におけるいくつかの技法論は，実践に対する理論的基礎づけと，実践に基づく理論の検証という，「持続する相互作用」（Fenichel, 1938）を進めていく姿勢をもっている。このような技法論ないし，治療論の中で，バリントによるそれは，固有の役割を果たして来た。今日の心理療法においては，治療者と患者との関係性が極めて重要なものであると認められるようになってきているが，バリントは早くからこの問題を論じてきた先駆者であった。本論文は，以下の順に批判的に検討している。

第 1 章では，「治療の場における二者心理学」について，その起源から説き起こし，他の研究との比較から，この概念を明確化する。そして，バリントの理論を新たな観点から捕らえ直さねばならない，と説く。

第 2 章では，この「二者心理学的観点」から，バリントの言う「basic fault」（この語は中井久夫によって「基底欠損」と訳されているが，山中康裕や岡野憲一郎らによって異なる見解が提出されている）の概念を再検討し，これが，個人の病理を指すよりも，二者心理学的観点への転換の必要性を示すものであることを明らかにする。

第 3 章では，バリントの師であり，精神分析の草創期に，関係性の問題に取り組んだ，フェレンチの治療論を取り上げている。その到達点は，現代の研究と比較してさえ，二者心理学的な姿勢を明確に打ち出したものであったことを指摘し，これを再評価する。そして，本論での批判的検討は，二者心理学が導き出す一つの治療論を提示することにもつながる，とするのである。

第 4 章では，いわゆる「関係論的精神分析（relational psychoanalysis)」にも影響を与えているウィニコットの「移行（transition)」の概念を取り上げている。ここでは，この概念によって示されている治療論を，彼が挙げている臨床素材に基づいて検討される。ウィニコットは，1 回のセッションに関する詳細な報告を行っているために，ここでは，二者心理学的な解釈を具体的に例示することが可能となった。

第5章では，バリントの二者心理学が深化することにより，バリント自身の治療論が，どのように展開して来たのかが論じられている。特に，臨床素材の検討を通じて，彼の治療論が，従来の理解とは本質的に異なるもの，すなわち，「相互的な認識」に基づく治療論へと展開していることが示される。

かくして，本研究では，バリント，フェレンチ，ウィニコットらの治療論と，関連する現代の諸研究についての検討を行い，一つの治療論的観点であるところの「二者心理学的観点」を浮き彫りにし，この観点からの検討こそ重要であることを論じた。この検討過程において，治療の場において生じる事態と，そこで患者による語りを詳細に理解していく方法論について，さまざまな立場から検討していく必要があることが課題として残された，とするのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は，精神分析的心理療法における「二者心理学」の重要性を説き，その観点からみたフェレンチ，ウィニコット，バリントの本領域における寄与を明らかにしたものであり，さらに一歩を踏み込んで，彼らに元来包括的にはありながら，精緻化されていなかった部分について，若干の部分を進展させ，かつそれを治療論的観点から明らかにせんとした論文である。

本論文の一部は，いずれもレフェリーのある雑誌「心理臨床学研究」（19巻1号，p13-22，2001）及び，「精神療法」（第27巻，第1号，p46-53，2001）に発表されたものを骨子としており，他に，『魂と心の知の探求』（山中康裕編，p168-173，創元社，2001）に発表されたものがもとになっている。

なお，引用参照された146編の文献のうち，ただ7編のみが邦文献であり，他はすべて一部独文を含むが，ほとんどが英語文献であり，引用は著者の翻訳によるものとなっている。この領域の詳細な部分での議論は，いまだ本邦では問題とされていなかった領域であり，しかも単なる文献の翻訳紹介にとどまらず，これらを批判的に読み込んでおり，著者独自の見解をも明らかにしていることからも，本論文がきわめて先進的な領域を扱っていることが知られる。

そもそも，本論文に着手した着眼点は，「転移の解釈」が最初の疑問であるといい，それは何に基礎づけられているのか，というところから取り掛かったという，その臨床的根本態度は評価された。つまり，治療的行為は，解釈にしても，沈黙にしても，治療者からの働きかけと二人の間での相互作用であり，関係を離れては，それらはありえないわけで，そこから出発しているのである。

さて，本論文における方法論的認識としては，精神分析における，「観点」そのものを明らかにすることであり，現代において，二者心理学の表面的な概念そのものは流行していても，その内容がバリント，フェレンチら提唱者が言っている文脈で理解されていないことをとりあげ，治療者—患者の相互作用としての出発点を明確にし，二者心理学の概念を明確にすることにあると言うが，これは現代の研究における大切な批判的視点であり，これも評価される。

ここにおいて臨床的，実証的とは，何を意味しているのか？　の問いに対して，まず臨床的とは，一人一人の1回のセッション毎におこってくる二人の関係の中で生じるものを創造であるという立場でみていく態度をいい，実証的とは，理論の一般化の際に，実験的手法とは違って，きちんとした手続きをへて仮説を立てこれを検証していく方法である，とするが，臨床的根本においては間違ってはいないが，実証的という意味では幾分偏っていることが指摘される。

さて，ここにおいて，二者関係の心理学においてバリントが明らかにした点の一つを，「われわれは気づかぬうちに，本能の緊張，置き換え，行動化，反復強迫，言語的ないし前言語的情動の転移といった，使い慣れた個人化用語での記述に陥ってしまう。それらは個人を越えるものではないために，ある本質的な特徴を看過している。これらすべての現象が，二人の個人間の相互関係の中で，常に変化し発展している対象関係の中で生じていることである」という点であるとし，また，フェレンチの明らかにしたことは例えば，「患者の連想は過去を再構成する素材として見られるだけでなく，現在の治療関係を反映するものとして捉らえられ，そのような理解に基づいて，治療者が過ちを認めることによって，患者との信頼関係が生まれ，治療的困難はここで初めて打開されるのである」といった部分であるとされるが，こうした点への着目と精緻化は大きく評価される。

また，basic fault に関して，これをめぐるいくつかの意見を参考にしながらも，二者関係の中での治療関係の基盤における傷つきであることを鮮明にした点も評価される。

しかし，問題点もいくつか指摘される。まず第１に，バリント，フェレンチ，ウィニコットを精緻に読み進んだことは評価されるが，これらはどこまでも他人の臨床素材であり，著者独自の臨床的素材に基づいての提案がないことで，彼ら３者の提案をあきらかにするに止まっている点である。臨床的論文は，単に，文献的検討だけでは不足で，やはり，実践的な自身の経験をもととせねばならない点が指摘される。

第２に，著者自身の，実際の臨床の場での在り方と，論文とに幾分かの乖離のある可能性が指摘される。例えば著者が，自身の論文において述べんとすることは，臨床の場で実践しうることでなければならない，とする点などである。

しかし，いまだ本邦においてはあきらかにされていない部分に関して，幾多の欧文文献を精緻に読みこみ，ここまで「二者心理学」の重要性と必要性を論じ，従来の問題点をあきらかにする論陣をはった努力は認められ，上記の欠陥は，博士論文としての決定的な欠陥ではないとされた。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また，平成13年12月12日，論文内容とそれに関連した諮問を行った結果，合格と認めた。